



TITLE:

福岡藩育子策再論

AUTHOR(S):

本庄, 榮治郎

CITATION:

本庄, 榮治郎. 福岡藩育子策再論. 經濟論叢 1933, 36(3): 572-576

ISSUE DATE:

1933-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130290>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號三第

卷六十三第

行發日一月三年八和昭

論叢

法人所得の累進課税・・・・・・・・・・法學博士 神戸 正雄
純生産力について・・・・・・・・・・文學博士 高田 保馬
ケトレー直後の英佛統計學・・・・・・・・法學博士 財部 靜治

時論

地方財政調整交付金を批判す・・・・・・・・經濟學博士 汐見 三郎

研究

農民離村とゴルフ法則・・・・・・・・・・經濟學士 八木芳之助
均一値段營業に就て・・・・・・・・・・經濟學士 大塚 一朗
中央銀行協力の發展に就いて・・・・・・・・經濟學士 松岡 孝兒

說苑

福岡藩育子策再論・・・・・・・・・・經濟學博士 本庄榮治郎
漁業組合の經營・・・・・・・・・・經濟學士 蜷川 虎三
獨逸及佛蘭西の所得税・・・・・・・・・・經濟學士 柏井 象雄

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

説苑

福岡藩育子策再論

本庄榮治郎

福岡藩の育子策については、既に本誌第三四卷五號に於て之を論じたが、昨年十一月同地に史料採訪の機を得、福岡高等學校玉泉館及福岡縣立圖書館等所藏の文書中育子策關係のもの二三を獲ることが出来た。前稿に論じた所は主として寶曆以後のものであつたが、這般入手した所のもは享保乃至明和のものが多く、茲に前稿を補足する所以である。終りに玉泉大梁氏遠藤正男氏及縣立圖書館の厚意を深謝する。

一

福岡藩に於て黒田繼高時代(享保四年十一月乃至明和六年十二月)に間引矯正の令が發せられ、その一例として寶曆十四年六月の掟を前稿に掲げたが、延享元年十月一日の令には『捨子之儀去ル享保八卯年翌辰年も御法度被仰出候得共未相背候者有之候』云々とあつて、既に早く享保八

年に制禁のあつたことが明かである。右に所謂捨子が間引子のことであることは前稿に論じた處を参照せられたい。なほ享保十七年十二月十三日、同二十年九月十五日にも次の如き同様の禁令が發せられて居る。²⁾

『一、近頃捨子多有之通相聞候。猥に捨申儀に而無之候。吟味の上、紛數儀於有之は後日顯といふ共其料輕からず候事』(享保十七年)

『一、捨子之儀前々々制禁に候。出生早速捨候も同前の事候條此已後堅捨不申様可仕候

右之通被仰出候。夫々養育に付了簡違仕候も有之と相聞候之條、此以後違背不仕様入念奉行中才判可有之事』(享保二十年)

同様の禁令は屢發せられてをる。例へば元文二年正月二十四日、同三年一月二十四日、同四年一月十五日、寛保三年十月三日、延享二年六月二十日等である。³⁾

この中元文四年及寛保三年の令は略ぼ同文であるが、庶民のみならず、家中の者にも之を戒めて居ることは注意すべき點であらう。即ち曰く

『一、捨子之儀近年被仰出候得共不相止と相聞候不届の至候此以後は家中は主人より不相背様に申付、町は其町年寄、

1), 2), 3) 郡役所定(福岡藩郡方記録)

在浦は其村其浦庄屋共常に無油斷申付、曾而捨不申様可仕候事『元文四年己未正月十五日』

二

間引矯正のため、養育米を下附することは、多く行はれた方法であり、福岡藩に於ても文化頃には、貧窮者に救助米を支給せしことは既に前稿に述べた如くであるが、元文及明和の令によれば隣保救済の方法を採つたものの如くに考へられる。即ち元文元丙辰年五月廿三日の令を見るに、

『

宗像郡大庄屋

徳重村

藤八

野坂村

市三郎

大穂村

藤五郎

元木村

治助

耕作人不足に而は雇抹に相成事候故、捨子不仕様に兼て存寄居申候處、去冬捨子不仕様被仰出候付、何も申談貧究之者迄も捨不申養育之ため、郡中人別島目四夕又は八夕宛年

福岡藩育子策再論

々指出置、出生之節貧究之者に米一二俵宛遣可申旨仕組相立、郡中村々庄屋申談候處、得其意候。彌申付候て其通に仕度旨申出候、則其次第達御耳候處、耕作心懸專一御仁政之筋相立、觸下村々納得仕候様可仕段奇特之至思召候。右仕組相立候様可申付旨被仰出候條、全村の庄屋は申に不及末々迄相守候様に可申談候

右書付郡奉行に六郎太夫相渡之

』

右に由れば郡村の各自が年々一定額の鳥目を醸出し、これを積み置きて、出生の際貧窮者へ米一二俵づゝを支給せんとするものであつて、全く隣保救済の方法である。藩政府より救助米を下附する方法でないことは明かであり、また右の如き方法を郡村各自に於て企圖し藩政府の許可を得て廣く實施せんとしたものもの如く考へられる。猶『耕作人不足』云々とあることは、間引と農村勞働力との關係を指すものとして注意すべき點であらう。

次に明和四年亥十一月二十日の令を見るに、曰く、
『捨子仕候儀連々御制禁之處、心得違、間々殺捨候も有之旨相聞、甚御苦勞に被思召上、以後急度相改全養育仕候様に可達宰判旨、去申ノ年奉行中の重御控書を以被仰付、末々

4) 郡役所定(福岡藩郡方記録)
5) 御法令、上卷

迄相違候處、御仁政之段一統感服仕候。自然養育難及自力候者は、方角一組切助合、又は少々之貯有之者は、右体之者爲養育米銀兼而指出置、全養育仕候様に仕法相立候段、其砌達御聽御喜悅之御事に候。然處今度從公儀別紙御書付之趣被御觸候間、御國中未々迄相違、彌以生子殺捨之儀相違候様に猶又急度被相示候様に可相達旨被仰出候。助合儀等懈怠無之様ニ重疊遂卒判、自然助合之儀難相調譯も有之節は速に可申出候事

當職

吉田久兵衛

明和四年亥十一月

町奉行

郡奉行

浦奉行

右にいへる申ノ年とは明和元年のことであらう。而

して養育の方法として『方角一組切助合又は少々之貯有之者は右體之者爲養育米銀兼而指出置、全養育仕候様に仕法相立』云々とあることは、即ち元文元年の場合と同じく隣保救済の方法によつたものである。なほ公儀よりの書付とあるは、明和四年十月の間引禁制の幕府よりの令⁶⁾を指せるものに外ならぬ。

更に明和六年三月朔日の御書出を見るに、⁷⁾

『郡町浦におゐて是迄取斗候通極老に及、寄所無之もの、又は孤或は産子養育難仕もの、惣而飢寒に及候程の者有之は其所頭立候者申談、助合之仕法相立養育仕、其次第可申出、若所により育難相成儀も有之ハ可申出、御救可被下候事』とあつて、隣保救済の方法の存することは明かであるが、もしその方法に據り難き場合には特に『御救可被下候事』とあつて、藩よりの救済もあつた如くであるが、之は恐らく例外的のことであらう。また同年四月八日の御書出に、『産子養育之仕法相立居候得は』とあるは、上述の隣保救済のことをいへるものに外ならぬ。

『産子を捨候儀は堅御制禁に候。近來乳吞子を人家を便、捨置候類有之候。産子養育之仕法相立居候得ハ右之類有之間敷事に候。貧窮之者産子養育之儀彌其所頭立候者共、無解怠心を添候様に可被相示候事』

降つて天明七年十月の令⁹⁾に於ても明和六年三月の令と略同様の趣旨を示せるものがある。即ち左の如し。

『一、捨子仕候義連々被仰出之通堅御制禁に候處、間には捨殺候も有之趣相聞へ、偏に有間敷不仁の至に候。右之趣御

6) 拙著、人口及人口問題、111頁參照。

7) 令、上卷。

8) 御法令、上卷。

9) 百性教示。

上にも別而御苦勞に被思召候に付、全養育候様、追々可致才判旨奉行中に重き御控書を以被仰出候。毎々相達置候通り候之條、堅く相守、懷婦有之は組合切心を付、養育之義申合せ、萬一養育之手段難相調節は付役人に可申出候事』

右に述べし隣保救済の方法が何時迄繼續したものであるかは明かでないが、前稿に述べし文化五年六月の改正は、救済方法そのものの改正といふよりも、寧ろ救育に關する掛り役人の範圍についての改正と考へられる。尤、藩政府よりの救済が其後と雖、貧窮者に限つて居たことは既に前稿に述べし所の如くである。

三

間引矯正のために訓化の方法を採つたことは各藩各地にその例の存する處であり、僧侶などが多くそれに關係を持つてゐたことも既に私の論じた處である。¹⁰⁾福岡藩下に於てもその例がある。延享元年十二月廿六日に『在々出家社人山伏等捨子御停止之旨を致勸辨常々百姓共に教示いたし可申候事』との令を出しており、一般的に教化訓育のことを獎めてゐるわけであるが、次の二令によつて、¹¹⁾僧帆牛なるものが各地を廻村して

訓化に力むることを認めたことが明かである。

『捨子之儀去ル享保八卯年翌辰年も御法度被仰出候得共、未相背候者有之候。御法度不相守段不届の至に候。然處帆牛と申出家歎歎存、御國中相廻、何とそ末々相勸見可申趣申出、寄特に思召候に付其通に被仰付候。右僧相廻り候は、勸にしたかひ御法度も相守、此已後捨不申様に可仕候事。

右之段家中町在浦々に可相觸候。若相背候は、辰年被仰出候通主人組頭町郡浦奉行郡代等才判ゆるかせの御沙汰に相成、尤年寄庄屋はきひしく科に可申付候。以上

帆牛郡々浦々相廻候節、止宿之儀同人望次第、若在家に止宿候は、村として一汁の認出可申事

右書付郡、浦奉行に六郎太夫相渡(延享元年十月一日)

在々

出家
社人
山伏

先頃郡方々在々相達候通捨子相戒のため曹洞派僧帆牛廻郷致、教化之節其村々旦那寺の住寺は申に不及、社人山伏出會申談相しめし可申候、捨子誠の儀は出家社人としては常に教示可仕儀は勿論の事に候條此以後第一其所々旦那寺の住持請持不絶教化可仕候。其次第郡代中々可相尋候間相守候や不守候や無遠慮可申達

右書付町奉行へ相渡、郡代中も此旨相心得居申候ため右書

10) 拙著、人口及人口問題150頁以下。

11), 12) 郡役所定。

付寫郡奉行の彦兵衛相渡』延享元年十二月廿六日

次に掲ぐる延享四年七月廿日の令によれば、¹²⁾僧鶴齡も右と同様廻村教化の事に當つた如くである。

『捨子仕間數旨連々被仰出候處、今以端々捨候者も有之と相聞候。此節穗波郡大分村妙圓寺鶴齡と申僧、右の風俗歎ケ數候間御免被成候は、御國中廻郷教化を以相止候様進申度旨申出候。追々被仰出候通彌急度相守末々懈怠不仕様に其所々頭立候者共無油斷才判可仕事

右書付町郡浦に相觸候様三奉行の月番正太夫渡之』

民間特志者の教化は勿論右に限つたわけではなく、同地方に於ても育子教諭書の存することは既に前稿に述べた如くであるから、他にもかゝる教化に従事したもののあつたことは考へ得らるる所である。

四

文化以後の實例に於て貧窮者に救米を下附し、それがため妊婦調査をなしたことは前稿に述べた通りである。この妊婦調査に關する書上は、文化文政頃のみならず、天保二年正月、嘉永五年三月、萬延元年七月、文久三年四月等のものも現存してゐるから、この調査

は幕末まで引續き行はれてゐたことは明かである。

× × ×

以上によつて新に入手した史料による補稿を終つたのであるが、享保頃からその例のあることは注意すべき點であると思ふ。勿論從來私の述べた所によつて享保以前から其例はあるが、¹³⁾多く存するものは大抵寛政前後のものであるからである。

13) 拙著、人口及人口問題、130, 137, 142頁等參照。